

その間に、王子はまたブクブクとナガナガと火の目小ぞうの三人をあつめて、こんばんの手くばりを決めました。「では、しっかりたのむよ。へたをすると、わたくしばかりではない、おまえたち三人の首も飛ぶのだよ。」と、王子は笑いながらこう言いました。ナガナガたち三人は「何、だいじょうぶでございます」と、すましていました。そのうちにすっかり日がくれました。王子はそれといっしょに、王女のおへ屋へ行って、昨夜と同じように、王女と向き合っていすにかけました。王子はもう今ばんこそは、どんなことがあってもねむらないつもりで、息をのんで番をしていました。すると王女は、しばらくたつとまた例のように、「ああ、ねむいこと。まあ、どうしてこんなにねむくなるのでしょうか。何だか、まっ赤なものが、もうっと両方の目の上にかぶさるような気がします。ちょっと休

みますからごめん下さい。」と言いながら、
ふらふらと立ち上がって、長いすの上に横に
なってしまいました。その後は、また前のば